

『法政大学国際日本学研究所研究報告 第4集』

日本の中の異文化―蝦夷の世界―

鈴木 拓也

一

本書は、二〇〇三年八月十六日(土)・十七日(日)に、岩手県陸前高田市で行われた法政大学国際日本学研究所主催のシンポジウム「海の蝦夷―小泉遺跡が語りかけるもの―」の内容を完全収録した報告書である。このシンポジウムは、陸前高田市の小泉遺跡から多量の墨書土器が発見されたことを契機として行われたもので、筆者も大阪から参加させていただき、貴重な体験をすることができた。その内容が大部の報告書として迅速に公開され、広く一般に公開されたことは、学界にとつて誠に喜ばしいことである。

小泉遺跡は、一九八〇年と一九九九年に多量の墨書土器が発見された遺跡である。二〇〇一年に、岩手県花巻温泉で行われた第二九回古代史サマーセミナーにおいて、未発表資料が初めて紹介されたことを契機として、学界の注目を集めるようになった。中野栄夫氏(法政大学)のシンポジウム趣旨説明によると、中野氏は、その中に含まれている「厨」銘墨書土器に注目され、この遺跡が古代気仙郡の郡衙跡である可能性があることから、今回のシンポジウムの開催に至ったとのことである。

古代の気仙郡は、現在の岩手県気仙郡・宮城県本吉郡にまたがる広域の郡で、海道蝦夷と言われる蝦夷が居住する範囲に含まれる。しかし気仙郡に関する文献史料は非常に少ない。『日本後紀』弘仁元年(八一〇)十月甲午(二十七日)条に初見記事があるが、その後は延長五年(九二七)撰進の『延喜式』、および承平年間(九三二〜九三八)成立とみられる『和名類聚抄』を待たなければならぬ。これまでの蝦夷研究でも、海道蝦夷や気仙郡が主要なテーマとされることはなく、阿弖流為を盟主として律令国家に抵抗した北上川中流域の蝦夷(山道蝦夷)が議論の中心であったと言つてよい。

小泉遺跡とその墨書土器の発見は、古代気仙郡の歴史的環境を解明する上で画期的であるばかりでなく、海道蝦夷の実態に迫る手がかりともなる点で注目される。三陸沿岸の古代史について、まさにこれから本格的な研究が始まろうとする時に、一般市民に広く参加を呼び掛けてシンポジウムが開催され、その成果が公開された意義は大きい。

二

本書の大まかな構成は、次の通りである。

シンポジウム趣旨説明 中野栄夫「小泉遺跡との出会い」

基調講演 熊谷公男「山道の蝦夷と海道の蝦夷」

報告1 佐藤正彦「小泉遺跡とその周辺」

報告2 村木志伸「小泉遺跡の墨書土器」

報告3 伊藤博幸「東北地方における『厨』銘墨書土器について」

て」

報告4 八木光則「太平洋岸交流・交易の世界」

報告5 樋口知志「奈良末・平安初期の気仙地方」

全体討論会

シンポジウム配布資料集

陸前高田市小泉遺跡出土文字資料

小口雅史・畠山恵美子・中野栄夫編「北方史関係文献目録(稿)」

まず六人の研究者による基調講演・報告の筆録があり、次いで全体討論会の筆録、シンポジウム配布資料集(基調講演・報告のレジュメなど)、そして北方史関係文献目録が収録されている。以下、基調講演と報告1〜5の内容を、筆録を中心に紹介し、必要に応じてシンポジウム配布資料に言及することとする。

熊谷公男「山道の蝦夷と海道の蝦夷」(基調講演)は、まず蝦夷論・蝦夷社会・蝦夷支配についての近年の研究を紹介する。次に現宮城県北部から岩手県にかけて存在した山道と海道という二つの交通路を、『延喜式』民部式上から復元し、それを前提として区分されていた山道の蝦夷と海道の蝦夷の特徴を述べる。海道の蝦夷は、桃生城以北から三陸沿岸方面にかけての蝦夷集団の総称であり、閑村(現岩手県宮古市付近)・遠山村(現宮城県登米郡)などが有力であった。閑村の蝦夷は、霊亀元年(七一五)に、先祖以来国府に昆布を貢献してきたと述べ、貢納の便宜のために閑村に郡家を置いてほしいと申請しているので、七世紀代に中央政府に服属し、朝貢関係を結んでいたことが知られる。その南に位置する気仙地方の蝦夷も、中央政府に服属して、貢納物を差し出していた

可能性がある。そして海道の蝦夷は、稲作も行っていたであろうが、三陸沿岸に住む蝦夷の場合は、漁撈により大きな比重を置いた生業を営んでいた可能性も考えるべきであるとする。なお熊谷氏は、シンポジウム配布資料の中で、海産物の貢納のために郡家を設置するという閑村でのあり方は、小泉遺跡の性格を考える上で示唆的であるという重要な指摘をされている(一五二頁)。

佐藤正彦「小泉遺跡とその周辺」(報告1)は、小泉遺跡の概要と、その周辺の歴史的環境を報告する。小泉遺跡は、一九八〇年に墨書土器を含めた多量の土器が表面採集され、一九九九年に小規模な発掘調査が実施された。これまでにコンテナで一九箱分の土器が出土し、その中に一二点の墨書土器が含まれている。周辺には、多数の竪穴住居跡が検出された貝畑貝塚、鍛冶遺構や鏃・刀子が発見された友沼III遺跡など、注目すべき遺跡がある。軍見洞遺跡からは、東北で唯一の出土例である青銅製の銚子(さしなべ)が発見されており、市内からは蕨手刀が三振り出土している。また女神洞窟からは開窩式離頭銚頭が、大陽里遺跡からは土師器の時代の製塩土器が、岩倉遺跡からはヤスで突かれたとみられるアワビが発見されており、いずれも海に関わる生業を示す遺物である。このほか、シンポジウム配布資料には、小泉遺跡の近くにある「古郡」の地名など、地元の伝承についての情報がまとめられており、遺跡周辺の歴史的環境を考える上で興味深い(一八二〜一八四頁)。

村木志伸「小泉遺跡の墨書土器」(報告2)は、小泉遺跡出土の墨書土器を分析する。出土土器群の年代は、墨書土器に限って言えば、ほぼ九世紀の範囲に収まるとみられる。一般集落よりも須恵器の出土量が多く、

墨書・刻書の比率が非常に高いという特徴がある。確定できた墨書は、

「吉」が一〇点、「羽」が四点、「主」が三点、「具」「干」などが各二点、「厨」「下」「中」「化」「集」「木」「一」「止」「生」「土」などが各一点である。書き手が多く、達筆なものから稚拙なものまで見られる。

「厨」は官衙の存在を示す文字であるが、それ以外は東国の集落遺跡から出土する一般的な文字である。小泉遺跡は、磐城郡衙の近くで大量の木簡・墨書土器を出土した荒田目条里遺跡（福島県いわき市）と立地がよく似ており、これだけ大量の墨書土器が出たこと、「厨」の文字があること、硯のように使用した痕跡のある墨書土器があることなどを総合的に考えると、この周辺に官衙の存在を推定することは可能であると結論づけられている。

伊藤博幸「東北地方における『厨』銘墨書土器について」（報告3）は、東北地方における「厨」銘の墨書土器を集成し、分類・解析を行う。これまで「厨」銘墨書土器が出土している遺跡は、a城柵ないし国府跡、b郡衙跡、cその他の官衙遺跡、d官衙関連遺跡の四つに分類できる。

各遺跡における出土地点を見ると、秋田城・払田柵・胆沢城では政庁域と外郭南辺に集中する点で共通している。厨の構造がわかる遺跡は、平城宮大膳職跡と胆沢城府庁厨跡であり、ともに井戸を中心に長屋を配置する構造を持っている。一方、郡衙遺跡では、厨の遺構はまだ見つかっていないが、根岸遺跡（磐城郡衙）・泉麿寺跡（行方郡衙）・清水台遺跡（安積郡衙）のあり方を見てみると、二〜三㎞ほどの範囲に郡衙を支える遺跡群が広がっており、その中のさまざまな場所から「厨」銘の墨書土器が出土している。なお、シンポジウム配布資料には、岩手・秋田・

宮城・福島各県で出土した「厨」銘墨書土器を集成した一覧表があり、有益である（二二二〜二五頁）。

八木光則「太平洋岸交流・交易の世界」（報告4）は、近年の発掘調査の成果から、蝦夷社会における太平洋岸交流・交易の様相を明らかにする。東北北部・北海道と南の地域との交流は、古墳時代から見られるが、七世紀になると活発化し、末期古墳が築造されるなど、南北の交流がよく読み取れるようになる。八世紀になると、蝦夷の朝貢に伴って、和同開珎や銅製の鍔帯、蕨手刀などが蝦夷社会にもたらされる。胆沢城・志波城・徳丹城が造営される九世紀には、城柵に出仕したり、朝貢した蝦夷が着用したとみられる石帯が、城柵の周囲から出土するようになる。

十世紀には城柵が衰退し、津軽を拠点とする新たな北方交易が始まり、須恵器や鉄製品が交易のために生産されるようになる。太平洋岸の特産物としては、考古資料からは幣伊の鉄、久慈の琥珀が知られ、文献史料『延喜式』からは昆布や毛皮があったことが知られる。そして、小泉遺跡のある気仙地域は、北部的な要素と南部的な要素が混在しており、国家側と蝦夷側の接点であったとの見通しを示される。

樋口知志「奈良末・平安初期の気仙地方」（報告5）は、気仙郡の建郡までの過程と、その役割を考察する。まず三十八年戦争は、宝亀五年（七七四）に、海道蝦夷による桃生城襲撃事件として始まったが、これには気仙地方の蝦夷も加わっていたと推定される。桃生城は北方の諸産物を交易によって入手する機能を持っていたので、気仙地方の海産物も収取していたとみられ、このころ国家が北方産物の収取を強化したことが事件の背景にあったと考えられる。また延暦八年（七八九）の征夷で

は、征夷軍の別動隊が気仙地方あたりまで進軍していたことが、征東大將軍紀古佐美の戦勝報告に見られる「海浦の窟宅、また人烟に非ず」などの表現から推測できる。そして気仙郡の成立は、磐井郡成立の直後、おそらく延暦十五〜二十年（七九六〜八〇二）ころと推定される。シンポジウム配布資料では、気仙郡の初見記事である『日本後紀』弘仁元年（八一〇）十月甲午条が、渡嶋（北海道）の蝦夷二〇〇人余りが気仙郡に到着したという内容であることから、気仙郡が北海道の産物を交易する場として機能していたことを推定されている。

以上が基調講演と報告の概要である。いずれも考古学の新しい調査成果を踏まえ、あるいは文献史料に新たな解釈を加えて、気仙郡あるいは海道蝦夷の歴史に新たな論点を提示する刺激的な内容となっている。

三

本書は、シンポジウムの内容を収録した部分だけでも二四七頁の分量があるが、これに三〇四頁にも及ぶ「北方史関係文献目録（稿）」が付属する。これは、一八八四年から二〇〇三年までに発表された北方史関係の論文を集成し、刊行年月の順に並べたものである。文献目録として有益であるとともに、一二〇年間の研究の流れを知る上でも興味深い。

なお、本書は非売品であるが、デジタル版が、

<http://aterui.hosei.ac.jp/cgi-bin/center/kankoubutu.html>

で公開されており、冊子体を手でできなくても、容易にここからファイルをダウンロードすることができる。これはPDFファイルなので、膨

大な文献目録も含めて全冊内の検索が可能である。

小泉遺跡は、気仙郡衙跡またはそれに関連する遺跡である可能性が指摘されているが、まだ明確な遺構は発見されておらず、詳細は今後の調査研究に負うところが大きい。陸前高田市教育委員会では、二〇〇三年以来継続して発掘調査を実施しており、全容の解明が期待される。

三陸沿岸の古代史は、今まさに本格的な研究が始まったところであり、本書はその基本的な文献として、今後大いに活用されるべきである。本書によって海道蝦夷の研究が大いに進展し、豊かな地域史像が描けるようになることを願って攔筆する。

（A4判、五五二頁、法政大学国際日本学研究所、二〇〇四年三月刊、非売品）

（すずき・たくや 近畿大学文芸学部講師）